

「薫り立つ」

目を凝らし無数の彩りにたたずむとき
ミステリアスな香りが一面に漂い
私の鼻孔をくすぐる
陽の光が満ち溢れるとき
植物は緑のソナタを奏でる
私のがくに優しく触れて
花びらはほころび
恐れのない世界で
深紅や青、ピンクで彩る花になった
やがて恋人は詩をしたため
人々は大地の匂いに親しみ
花びらに触れ
あるいは樹液のみずみずしさを感じる

玲亜: 著者が何について話しているのかわかる?

ティン: よくわからない。何か理解できない個人的な喜びのようだけど。

ミン: 殆どの喜びはそうです。よろこびは論理的に伝えることができないのです。

悟: 確かに、すべての歓喜には神秘的に不合理なものがあるね。

- T Newfields (和訳: 小林圭子)

開始: 1999年 桃園市・完成: 2009年 東京都

